

甲南英文学

NO.8 春 1993

甲南英文学会

編集委員

(五十音順、*印は編集委員長)

青山義孝 岩田良治 田中紀子 *常松正雄 中島俊郎 拵矢好弘

目次

<i>Adam Bede</i> の森	浅野萬里子	1
“great” in <i>Great Expectations</i> and <i>The Great Gatsby</i>	山口 徳一	11
英語の中間文について	小林 敏彦	23
縮約生起と英語のリズム	西原 哲雄	35

Adam Bede の森

浅野 萬里子

SYNOPSIS

Adam Bede is a beautiful pastoral novel. It describes villagers living according to the rhythm of the seasons. The grove as a symbol of nature is more than a background there, and it has important effects. Natural occurrences exert influences on the characters' minds. A wood causes some beguilement to be revealed and uncovers the truth as in *The Woodlanders*. The characters experience their personal hardships there.

George Eliot emphasizes the significance of sympathy in life. Whether a character remains in the village or not depends on his or her sympathy with the woods and with other people, that is, on his or her harmony with nature.

Adam, the main character, is forced to live through some trials in the woods and by means of a difficult reconciliation with his opponent gains real sympathy, continuing to live on there.

Adam Bede (1859) に描かれているのは 1790 年代末の農村であり、当時は産業革命後のさまざまな変動が見られる時代であるが、ここには未だ安定と平穏の農業世界が広がっている。つまり変動そのものには焦点があてられておらず、その点を批判されてもいる¹のだが、George Eliot の関心はあくまで人間の内面に起こることである。そしてその内面をもつ個人が環境とどのようにかかわるかが描かれている。Adam をとりまく環境とは、時代の流れからとり残されたようなひっそりと静かな農村であり、その自然環境は、Thomas Hardy の描く自然のように人間に強力な支配力で大きく影響するというのではないが、しかし単なる背景にとどまらず登場人物の生き方と密接にかかわっている。

G. Eliot の次の作品 *The Mill on The Floss* (1860) においては、その第一章冒頭部分の描写について Reva Stump が “an image of what appears to be a naturally harmonious setting”² と述べている。広い平野を川の水は急ぎ流れて海へ注ぎ、そしてその川沿いの農地に間もなく芽を出すであろう種が播かれ、その風景の中に帰途を急ぐ農夫の姿が現れる。これは自然の営みの

中で人もまた自然の一部として調和して生きる様を示したものであり、その意図は *Adam Bede* にも既に表されている。*Adam Bede* は 1799年6月のある夕べに始まり、1807年6月の夕べで幕となるが、最初の1年は6月のAdamの父の死に始まり、AdamのHettyへの恋心は次第につのって、8月、夏の盛りにHettyをめぐるArthurとの格闘を経て秋にHettyとの婚約、一見実るかと思われたAdamの恋は不毛の冬となり2月にHettyの家出、嬰兒殺し、裁判と続き、春に向かう。その後も日々、季節という自然のサイクルが繰り返されながら進行する。一般的に森は季節の移ろいととも枯れては再び芽を吹く自然のサイクルが如実に表現される場所であり、*Adam Bede*の森も *The Mill on the Floss*の川と同様、そのサイクルの中心的役割を果たしていると思われる。

Adamは腕のいい大工であり、木の香りに包まれた作業場で仕事に励む彼の姿、即ち丈高く頑丈なその体格には逞しいオークの木のイメージがある。かれは大工の仕事を‘the mother of a great tree’¹となるであろうどんぐりの実のようなものだと考えている。彼自身、どんぐりの実として大木へ成長していくであろう。木をこよなく愛するAdamが森の中を歩く様は次の通りである。

What grand beeches; Adam delighted in a fine tree of all things: as the fisherman's sight is keenest on the sea, so Adam's perceptions were more at home with trees than other objects.¹

このように木に喜びを感じ、木から精神的安らぎを得られるAdamはまさしく森の管理者に任ぜられるに相応しい人物と言えよう。オークは古代から聖木とみなされ崇拝されてきたことを考えると、そのイメージを持つ彼の管理者としての立場もうなずける。宿屋の主人が旅人に問われるままにDonnithorn屋敷の説明をする際、わざわざそこに生えているオークに言及する場面がある。村人にとってそのオークは単なる木ではなく土地の象徴的存在にまでなっているわけだが、後に地主の後継者となるべきArthurではなくAdamがこの土地に根を下ろした存在として生き続けることが暗示されている。

Adamは作者の父親を念頭において書かれたと言われている。そのため人間の面白みを損なうほどに理想化されてはいるものの、立派すぎて間違い

を犯さない人間にありがちな欠点を備えている。Adam は弟 Seth と容貌も目の色もそっくりだが、「浮浪者も Seth からは、銅貨一枚恵んでもらえるだろうと期待しても、Adam に話し掛けることは殆どなかった」のだから、「人なつっこい慈愛溢れる眼差し」の Seth とは対照的な鋭い鋭い目の持ち主であろう。およそ人の過ちに不寛容な人物像が浮び上がる。従って、彼の木々に対する感受性が他者にたいしてどのように生かされるか、つまり木に対すると同様に人々への共感がどこまで及ぶかが Adam の成長の問題点となる。

木と人との共感 は Thomas Hardy の *The Woodlanders* (1887) の Giles Winterborne の場合、一層強烈である。Giles と Marty が縦の若木を植え付ける場面がある。彼には木を成長させる不思議な力が備わっており、無造作にやっているように見えても彼の手にかかるとその木は数日経つうちにうまく根付く。それは当然彼と木々との間の共感によるものであり、その魔法の指にやさしく触れられると苗木のひげ根は適切な方向を向く。これは彼自身が木の一部、あるいは木が彼の一部とも考えられる現象である。この「同類共感」⁵ は Marty の場合は木の息吹として表される。「木は寝ている間は少しも溜め息をつかないけれど、わたしたちが真直ぐに立てるとすぐに溜め息をつきだすのね」と語る彼女の耳には木のやさしい快い息吹が聞こえてくる。後に Grace が言うように、この二人は木や花の言葉で話すことができるのであろう。Adam にはこれほどまで木と一体化する場面はないが、それにしてもこれらの人物は皆、森の微妙な力をごく平凡に悟っているらしく、森の中では生気にあふれるのである。

森は外の世界から隔離された神秘的世界と言えよう。その世界は登場人物にさまざまな場を提供する。*Adam Bede* では、単純素朴で実直な Adam と心やさしくはあるが優柔不断な地主の後継者 Arthur とのつながりに、二人から愛される Hetty をめぐる展開が古い階級制度をふまえてなされるが、森はその時の Adam の成長にかかわる決定的事件の起る場所として用いられる。まず Hetty への思いに胸を焦がしながら Arthur が向かっているのは「楽しい迷路のような森」であり、まさに「妖精の出没するような森」だった。今や森は明らかに Arthur の内面を映し出している。この森で彼が Hetty に出会う午後の様子はその通りである。

...an afternoon in which destiny disguises her cold awful face behind a hazy

radiant veil, encloses us in warm downy wing, and poisons us with violet-scented breath.⁶

いかにも彼が誘惑に屈することを予感させる表現だが、ここからも想像できる通り、彼は身分違いの Hetty に故意に会ってはならないと思いながらも森へと向い、彼女の姿を目にすると一度固めた決意も崩れてしまう。彼が足を踏み入れたのは紛れもなく彼の心の内に潜む誘惑の森であり、そこに踏み込むことで悪い結果を生じることはすでにここで暗示されている。しかも Arthur にとってここに生えているブナやシナの木々には見るだけで気力を弱めるものが備わっている。しかし “...the strong knotted old oaks had no bending languor in them — the sight of them would give a man some energy.”⁷ とあるように、オークは Arthur を狂気と誘惑から救い出すような力強さをもっており、そこには Adam のイメージが備わっている。恋敵ということもあって、未来につながらない夢を描かせて Hetty の心を弄ばないで欲しいと Arthur に説き付ける Adam の姿が重なって見える。Arthur には理性を挫く森であっても、管理者としての Adam の目にはどの木々もみごとに美しいと映る。Adam はこの森の魔力にかかることなく、ここでも自分の意志を曲げることなく行動できる。

Adam が誘惑に身をゆだねた二人の姿を目撃するのは微風が葉をそよがせるだけの美しい黄昏時である。森の小径を気持ちよく歩きながら Arthur への楽しい思い出を巡らせたりなどしていたその時、Adam の視線を捕らえたのは二本の木がくっついたかのように見える一本の奇妙なブナの木だった。その木はまるで次の瞬間の出来事を予告するかのように彼を立ち止まらせた。森の中ではその冷酷さ、神秘性ゆえにさまざまなことが起こる。The Woodlanders の村の娘たちは聖ヨハネの前夜、未来の伴侶を占おうと思ひ森に入るが、その際 Fitzpiers は内気で迂闊な Giles に先んじて Grace をその腕に捕らえる。そして三人の関係は確立されたことになるであろう。紆余曲折を経ながらも最後までこの関係は持続されることになるからである。それはこの時の Adam ら三人の場合も同じである。そして丁度離れようとしている二人の姿に、Adam はこれまでの Hetty への思いは単に彼の一人よがりだったと思い知り、同時に長年抱いてきた Arthur への敬慕の念は一挙に吹き飛んでしまう。Adam には「果樹園の堀越しにぶら下がっている真っ赤な林檎」に見えた Hetty は実際にはくソドムの林檎>よろしく外見だけが美

しい代物だった。外面の美しさと同時に強い虚栄心をもつ Hetty は愛情を感じない Adam の心をも引き付けておきたい女性だということに彼は気付かない。彼女はあたかも〈不和の林檎〉として Adam と Arthur に争いをもたらす。この森の中で、Adam の目の前で、彼にとって辛い真実が暴露されたのであり、彼の大きな試練となる。

森には森の秩序がある。そこでは人間の小賢しさなど歯牙にもかけられず自然の秩序が息づいている。Grace は都会の洗礼を受けたため、かつて馴染んだなつかしい森との間に生じてしまった距離は、森の生活に戻って後も縮まることはない。ある日、自分ではよく知っているつもりの森の中で道に迷う。それは夫の Fitzpiers について Mrs Charmond と言い争った直後のことである。彼女は馴染みの森の道を歩いているつもりだったが、子供の頃に目印にした老木はすでになく、かつての小さな下生えが今は大きく育っている。彼女が森から離れて町の教育を受けている間に、森も変化し彼女から離れてしまったのであろう。今や森は彼女に冷酷でなかなか出口を示してくれない。そうこうするうちに、やはり迷っていた Mrs Charmond と会い、肩寄せ合って寒さを凌ぐうち Mrs Charmond は Grace に Fitzpiers との関係を告白するはめになる。Grace が夫の不実を知るのはこの時ばかりではなく、何度か森の中で彼の嘘を悟る場面に遭遇する。暗い森の径で Fitzpiers は相手が Grace の父とは気付かずに自分の結婚についての後悔を喋ってしまうが、そのあたりは下生えが茂り、亡霊が出ると人の言う場所である。Fitzpiers が Grace 親娘をいかに言葉巧みにごまかそうとも森の中では通用しない。

G. Eliot は人生を過去・現在・未来の一本の流れとしてとらえ、その流れを拒絶した生き方には何の発展もなくそこからは何も生まれてこないと考える。「過去の生活をすべて捨てることができる」Hetty は、長く一緒に暮している Poyser 家の人々に対しても、また彼女が面倒をみてきた子供たちにさえも愛情を抱くことはない。彼女が嬰兒を置き去りにして死なせてしまったことはやはりその流れの中断である。彼女の家出は、はるばると苦勞を重ねての長旅でもあったのだが、運悪く Arthur がいるはずの場所にいなかったことでその計画は見事に失敗した。それから後の途方にくれた彼女の苦しみは the struggle between Hetty's life-wish (her love for the child) and her death-wish (her sense of shame)⁴ として続けられる。途中、彼女は池のある森を、木の茂みを必死に探した。木々に隠れ、水に身を沈めたかったか

ら。ほんの数カ月前、森とは彼女に夢を見させる場だった。その時の彼女には目の前に存在している現実のものは見えず、ただ「何か可能なもの」だけが見えていた。つまり Arthur の背後の「彼女のこれまでの日々とは異なるであろう」生活が見えていた。森は彼女の現在とは何かかわりもない単なる虚栄を映しだす鏡の世界であったのかもしれない。そして今、彼女は現実の自分の姿を突き付けられ、それから逃れるために森を探している。現在の彼女の立場そして嬰兒を隠したいという気持ちは、過去を否定し現在と対峙していない表れである。彼女の未来へとつながる流れは当然途切れるであろう。しかしそんな彼女を守ってくれる森に出会うことはなかった。苦しみの末、彼女は森の中の木の下の穴に嬰兒を置き去りにする。そのうちに誰か嬰兒に気付いてくれるかもしれないとの微かな期待を抱いてはいたものの、彼女のこの行為は思考力も働かず判断力もなくなった彼女が森に嬰兒を委ねたことになる。しかし森は彼女に厳しかったのである。この事件の発生と同様、その解決もまた森の中で行われたことになる。彼女の放浪は過去を断ち切ろうとただけでは、新しい未来を見出せない例である。Giles が長年抱いてきた夢であり、同時に現実でもある Grace への愛を守り抜いたのは、彼の世界、即ち森の中だった。彼女が夫から逃れようと家出し、踏み込んだ森は不気味さがにじみ出ている。

The plantations were always weird at this hour of eve—more spectral far than in the leafless season, when there were fewer masses and more minute lineality. The smooth surfaces of glossy plants came out like weak, lidless eyes: there were strange faces and figures from expiring lights that had somehow wandered into the canopied obscurity...⁹

こんな森が Grace をやさしく迎えてくれるはずがない。更に森の中の嵐の夜は彼女を孤独の淵へと追いやる。しかし、それまで自分の身の上ばかりを案じていた彼女が、その孤独の中でこそ Giles の苦境にふと思い当たったのである。自分の住み家を彼女に明け渡した彼の姿はどこにも見えない。風に混じって聞こえてくるのは森の発する囁きなのか、彼の呻き声なのか... 森がその懐深く彼の姿を隠したかのようなのである。やっと捜し出した時、彼はすでに瀕死の状態になっていた。彼はついに森の土に還り、森と、木と、完全に一体化することになる。

先に述べた通りに森と深く結びつき、森との調和の中でその土地に根を下ろす人物もあればその逆の生き方をする者もある。Fitzpiersは彼の部屋から発する奇妙な光と同様、最初からこの土地とは余りにも異質な存在として登場する。なぜならこの土地は変化と言え、*「四季の変化を生じる規則正しい地球の回転から起こる変化」*ぐらいのものだからである。従って彼がこの自然に即した森の生活に同化できず、また同化することはプライドが許さず、ついには去ることになっても何ら不思議はない。ところが Arthur はその土地から生え出たも同然の育ちで、地主としての夢も描いていたにもかかわらず、安住の地を去ることが彼の選択だった。それは自分の過去を断ち切るのではなく、むしろその過去を背負えばこそ Adam の前から去らねばならなかった。後の夢のない失意の人生を考えると悲劇的解決法に違いないが、成長の証とも言えよう。しかし馴染んだ土地から去ることは必ずしも好ましい選択とは言えない場合が多い。森の生活にはおよそ不向きな教養を与えられた Grace はこの土地に根を下ろすこともできなかったが、かと言って森から去った後にも明るい展望は望めない。この Grace と比べれば Hetty はずっと明白な意図をもって家を出ており、それは完全な現実逃避であって、内的問題を解決しないままに現実を正面から見据えることなく、ただ外的環境のみを変えようとしただけである。彼女は元来「ほとんど根のない植物」のようなもので、家族にすら執着しないことは先に述べた。Adam から Arthur との交際について忠告された時、彼女は櫟の葉をもぎ取り細かく裂く動作を繰り返す。ここに木に対しての何の共感ももち得ず、従ってこの森とも縁のないことが示されている。いかなる事態の下でも、彼女の関心事は彼女自身のみであり、彼女が思いを巡らせる他者といえ自分の虚栄心を満たしてくれるであろう相手、つまり Arthur だけである。しかも彼女は真に他者と相対しているのではなく、その他者を自分の虚栄のための鏡として用いているに過ぎない。Jerome Thale が述べている¹⁰ ように、G. Eliot の作品でははげ口のない感情は内に籠もり腐敗するが、それが Hetty の場合は虚栄であり、Arthur の場合は浅薄さや無責任となる。G. Eliot は「窓」を他者とのかわり方を示すものとして、「鏡」をエゴイズムの表現として用いる。Hetty への恋心から逃れようとする Arthur は「木々の健康な香りを入れるために窓をさっと開け」、もう彼女に会うまいと決意を固める。常に他者に心を開いている Dinah の窓から外を眺める行為と対照的に、鏡のみを覗いて満足していた Hetty は愚かな虚

栄の夢の果てに身重のまま村から逃げ出さねばならなくなった。しかも何の解決も得られず、彼女自身の内に成長の跡も見られぬまま一生を終える。

Adamにしてもこれまで何の迷いもなくこの地に定住してきたわけではなく、かつて家出を企てたことがあった。飲んだくれの父の元を去り新たにやり直そうと思ったのだが、その彼を引き止めたものは後に残される家族との過去からの思い出だった。そして今、Hettyの裁判の後、再びAdamはこの土地を去ろうと決意を固めた。Arthurへの激しい憤りを心の底に潜ませたまま、これを最後にと森に向う。そこは彼があゝの二人の姿を目撃した場所であり、激情に駆られてArthurに決定的一撃をくらわせた場所でもある。そして彼は例のブナの大木の前で佇む。

He knew that tree well; it was the boundary mark of his youth — the sign to him, of the time when some of his earliest, strongest feelings had left him. He felt sure they would never return. And yet, at this moment, there was a stirring of affection at the remembrance of that Arthur Donnithorne... It was affection for the dead: *that* Arthur existed no longer. "

森は彼に苦々しい思い出とともに、懐かしい過去をも蘇らせたのである。そこへこれも又、最後の散歩にとやってきたArthurが現れ、自分がこの土地を去り軍隊に入るのには皆に故郷を捨てずこの地に留まってほしいからであり、Adamには森の管理者の立場でいてくれるようにと訴える。この時のAdamのArthurへの復讐の気持ちは、ArthurとHettyの二人の姿を目撃したあの時より一層強かった。今のAdamにはArthurの言葉を受け入れ、Arthurもまた苦悩している事を認めることは最も難しい事だったに違いない。Adamは父の死に際して彼自身の不寛容を悔いたが、ここに至ってArthurと握手した時、ようやく真の共感を抱き得るようになったと考えられる。かつてのArthurと共有した過去が、Adamを再びこの地に留まらせたと言えよう。

Silas Marner (1861) の中では *Silas* の成長は昆虫の成長過程になぞらえて表現された。即ち、まず幼虫は殻に籠もってさなぎとなり、一見、生を感じさせない冬の時期を経て後その殻を破り、成長した姿で外界へ飛び立つのである。その自然のサイクルを用いる手法はすでに *Adam Bede* に見られる。森の中でArthurとHettyの仲がAdamの目の前で暴露されたのは夕暮時で

あった。それから後、長い夜を経て苦悩の朝を迎え、初めて彼には再生への道が開かれる。つまり Hetty の家出の理由を知ったとき、Adam は symbolic death を経験するが、このあたかも ドングリの実が地に落ちたかのような状態を経て、朝に Hetty の許しを求める声を聞くのである。そして先に述べた森の中での Arthur との和解によって彼は再生し、オークの大木へと育っていくことが暗示されている。このように日暮から夜明けへのリズムは、死から再生へのリズムとともに Adam に具現された。木々への共感とは他者への共感であり、自然との調和を保って生きることなのである。

「森はヤーススである。それはつねに二つの顔をもつ」¹⁾ と述べられるように、森は自然のもつ二面を人に見せる。森の破壊作用と再生作用の二面は、相反するものではなく、どこかで結びついている。森は Adam にとって生きる場であり生気を得ると同時に試練と苦悩の場ともなった。その森を「聖なる森」と自ら呼んだ Arthur には誘惑の森としての一面をも見せた。Hetty に甘い幻想を抱かせた森も、事態が変わると厳しく冷たい顔しか見せなかった。森がいかなる顔を見せようと Adam はその森に根ざした生き方をする。The Woodlanders においては、その結末で Grace が Fitzpiers の元へと去った後、Giles の墓にひとり花を手向ける Marty の姿には、森と人との共感が必ずしも人の救いとはなっていないと思わせるものがある。しかし森は「森の精」のような Giles の生と結びつき、同時にその懐深く彼の死をも呑み込んだのであり、Giles の仕事道具すべてを引き継いだ Marty に再生が見いだせる。

G. Eliot は Adam の父の死で始まる作品を Adam の子供たちの登場で閉じ、自然との共感をもって生きることによって光を与えている。ここには死から誕生へ、夕闇から夜明けへと繰り返される自然のリズムのなかで、自然の一つの姿としての森とのかかわりを通してひっそりとあくまでも平凡に生きる人々が描かれていると言えよう。

注

1. 例えば John Goode は '... the historical specificity seems merely decorative, ...' と述べている。John Goode, 'ADAM BEDE' in *Critical Essays on George Eliot*, ed. Barbara Hardy (Routledge & Kegan Paul, 1970), 19.

2. Reva Stump, *Movement and Vision in George Eliot's Novels* (University of Washington Press, 1959), 70.
3. George Eliot, *Adam Bede* (The Penguin English Library, 1981), 401.
4. *Ibid.*, 341.
5. 川崎寿彦、「森のイングランド」(平凡社、1987), 18.
6. George Eliot, *Adam Bede*, 175.
7. *Ibid.*, 183.
8. David Carroll, *George Eliot and the Conflict of Interpretations* (Cambridge University Press, 1992), 99.
9. Thomas Hardy, *The Woodlanders* (Macmillan, 1990), 266.
10. Jerome Thale, *The Novel of George Eliot* (Columbia University Press, 1967), 33.
11. George Eliot, *Adam Bede*, 509-510.
12. 川崎寿彦、「森のイングランド」、10.

“great” in *Great Expectations* and *The Great Gatsby*

山口 徳 一

SYNOPSIS

When we read Dickens's *Great Expectations* we would find that the word “great” in the title has only an ironical meaning. Whereas in the case of the “great” of *The Great Gatsby* by Fitzgerald we are sure to perceive not only irony but also the true greatness of Gatsby himself. This distinction in fact points towards a key difference between the attitudes of the two authors. Gatsby has a romanticism like the desire of the moth for the star, and Nick, who and Gatsby are generally considered as the inside and outside of the author, finally comes to feel his own superiority to Tom who embodies the eastern moneyed class in America. Dickens, on the other hand, was born into the class system of English society and went through the inexpressible misery of being a talented and ambitious son of a failed lower middle class father. As a result, he was never able to escape from feelings of social inferiority amounting to snobbery.

Dickensの多くの作品の中でもとりわけ傑作の呼び声高い*Great Expectations*。この作品が書かれたのは1861年から62年にかけてであり、彼のその六十年足らずの生涯において最も脂の乗り切った円熟期の作品であると言える。物語の舞台設定となっているのは彼の少年時代の中で最も幸福な時を過ごした楽しい思い出の地、ケント州のチャタムである。Dickensの作品が主としてロンドンを中心に展開されていることを考えてみるならば、この舞台設定のみによっても本作品が彼自身の自伝的要素を多分に含んでいるであろうということが容易に窺えるのであるが、さらに注目すべきは、彼がこの*Great Expectations* 執筆にあたり、これより約十年前の1949-50年に書かれた自他共に認める自伝的小説 *David Copperfield* の繰り返しを避けるために、もう一度その小説を読み返したということである。それによって、Dickensがより自己に忠実なる作品に仕上げようとしたことは明白であり、その意味では *David Copperfield* がサクセスストーリーであるのに対して *Great Expectations* が成功からの脱落物語であるということは

興味深い。しかしここで問題にしたいのは、遺産相続を当てにしたために結局は社会的成功を勝ち取ることの出来なかった青年の物語に付せられた表題が、他ならぬ *Great Expectations* であったということである。社会的成功に役立つどころか、人生における幻滅をもたらしたに過ぎない遺産に対して付加された “great” という形容詞。これはとりもなおさずこの物語が皮肉の物語であるということを明確に指し示していると言えるであろう。しかしもしこの物語の主人公の青年が、その遺産相続の見込みのもたらした幻滅によって人生における価値観を再発見し、新たな人生の指針を得て道徳的成長を遂げるのであれば、その遺産相続の見込みの持つ “great” はその時皮肉の意味から抜け出して本当の意味での “great expectations” となるに至るのではないだろうか。しかるにしばしば批評されるように¹この物語に流れるムードは徹底的にアイロニカルであって、我々は物語の大団円に至ってさえその印象から逃れることは決してない。故にそこには、作者である Dickens 自身の心にあるいわばしがらみのようなものが存在するという気がしてならないのである。

“great” の検証に当たって、ここではかの「失われた世代」の作家 Fitzgerald の代表作である *The Great Gatsby* との比較によって本論を進めていきたいと思う。なるほど確かに両作品は十九世紀と二十世紀という時代の差、更にはイギリスとアメリカという舞台の違いはあるけれども、そのタイトルからも明白なように、内容的に見て比較に値する数々の要素をふくんでいると思われるからである。

先に *Great Expectations* が Dickens の自伝的小説であると言ったように、主人公の Pip は Dickens を代弁するキャラクターであるが、一方 *The Great Gatsby* においても、自伝とまではいかないにせよ、Fitzgerald 自身が *Gatsby* であるということは衆目の一致するところであろう。このことは又、Fitzgerald 自身の「*Gatsby* を貫く観念は貧乏な青年は金持ちの女と結婚する事が出来ないということの不当さだ。このテーマは何度も何度も繰り返して僕の頭に浮かんで来る。自分が体験したことだから」² という言葉からも容易に窺える。そうはいつても *The Great Gatsby* においては *Gatsby* のみが Fitzgerald である訳ではない。物語の語り手である、東部社会に憧れて西部の辺境な町から出てきた田舎のインテリ青年 Nick Carraway と、そして当の *Gatsby* 二人一組で作者を具現していると考えられるからである。即ち *Gatsby*

自身は「自己欺瞞」のみで死に至ってしまったと思われるが、そんな *Gatsby* の姿を見て、そこから「自己認識」に到達する Nick、こういった二人の関係から考えても、両者は作者自身の裏と表であるということが知れるわけである。Pip においては彼自身が「自己欺瞞」から「自己認識」に至るのは幾分対照的ではある。加えて貧乏な青年が金持ちの女性との結婚を夢見するというテーマもまた、両作品に非常に共通した点であろう。Pip は高慢で美しい上流階級の娘である Estella に、そして *Gatsby* は金持ち階級の夫人 Daisy との結婚をそれぞれに夢見ているのである。更に言うならば、*The Great Gatsby* がある意味では「都会的ソフィステケーションと文化と腐敗を代表する東部、それに素朴な道徳を代表する西部との対比を描いた一種の悲劇的パストラルである」³とされるのに対し、*Great Expectations* も又見方を変えるならば、鍛冶屋の Joe Gargery の代表する田舎のモラルと、ロンドンの弁護士 Jagger とその事務員 Wemmick に代表される合理主義の対比という面からも解釈する事が可能であろう。物質的發展を精神的發展と混同してしまったアメリカの夢の持つ危険性を体現した *Gatsby* は階級的昇進、つまり紳士になることが道徳的成長に結びつくと考え違いをしている Pip とも又対比され得る。このように両作品は、互いに対照的な数多くの要素を含んでいる。がしかしそういった共通性、あるいは類似性が多ければ多いほどそこに現れた相違点が非常に大きな意味を持つことになるのではないだろうか。

両作品における最大の相違、それは先に述べたように *Great Expectations* における “great” がアイロニーの意味しか持たないのに対して、一方 *The Great Gatsby* における “great” は、*Gatsby* の greatness の欠如、つまり皮肉の意味における “great” と、そして本来の意味での彼自身の持つ “great” を暗示しているという点にある。それでは、*Gatsby* の greatness とその欠如とは一体何を意味するのであろうか。

Pip や Nick と同じように *Gatsby* も又、西部の田舎に生まれた農村少年であり、立身出世を求めて東部にやって来た男である。しかしここで注目せねばならないのは、東部にやって来た彼の究極の目的は上流階級の女性と結婚することであり、立身出世はそのためのいわば一つの手段に過ぎなかったということである。*The Great Gatsby* が執筆される約3年前の1922年に書かれた、破滅的な金持ちの娘に対する貧しい少年の愛をテーマとする短

編 “Winter Dreams” がその自伝性においても *The Great Gatsby* の前身となる作品であるというのは周知の如くであるが、そこで Fitzgerald は主人公 Dexter Green の心情を次のように語っている。

But do not get the impression, because his winter dreams happened to be concerned at first with musings on the rich, that there was anything merely snobbish in the boy. He wanted not association with glittering things and glittering people—he wanted the glittering things themselves.⁴

Dexter の口を通して語られた「きらめく物そのものが欲しかった」という、あたかも著者自身の本音とも言えるこの言葉からも明らかなように *Gatsby* の本質とはつまり、以下において Nick が語るころの星を求める蛾にも似たロマンティックな心情にあり、それこそが正しく彼の “great” の正体なのである。

...some heightened sensitivity to the promise of life—it was an extraordinary gift for hope, a romantic readiness such as I have never found in any other person and which it is not likely I shall ever find again.⁵

そういった彼のロマンティシズムはまさしくイマジネーションによって自らの崇高なる世界を創り出し、その想像の世界に同化してしまう、かのロマン派の詩人達の心情と同一の物であると言える。そしてその彼のロマンティシズムからわき起こる夢の具現化されたものが、Daisy という女性なのである。しかしながら *Gatsby* によって偶像化され、崇められている彼の夢の象徴であるところのこの Daisy はアメリカ文明のその華やかな表面によって惑わされた軽佻浮薄な、そして自身が起こした交通事故に対して何の償う気持ちも見せないことから分かるように、道徳的にも墮落した女性に過ぎない。故に *Gatsby* の偉大さの欠如、更には彼の悲劇もまた、そこに見いだされるのだと言えよう。つまり彼のロマンティシズムが求めて創り出した女性と現実の女性との間には大きなギャップが存在しているのであり、究極には彼を無惨な死へと至らしめることになるその現実とイマジネーションとの混同こそが彼の “great” の欠如であると言えるのである。しかし、

物質主義と産業主義の蔓延、禁酒法施行により横行するギャング、そして遊び呆けるフラッパー等によって象徴される精神的に空虚で乾いたかの時代であって、ロマン派の詩人達の心情を死ぬまで持ち続けた Gatsby はやはり “great” ではなかったか。

さてそれでは、Pip の Estella に対する愛情はどうであろうか。やはり、Gatsby のようにロマンティックな心情からわき起こったものであると言えるのであろうか。それを知るにはまず子供時代の Pip に目を向けなければならない。

物語冒頭の墓場でのシーンで、荒涼とした沼地の雰囲気にとたまたま泣き出してしまったり、囚人にやすりとブディングを盗み出してやったために警官が自分を捕まえに来るのではないかと本気で心配し、Mrs. Gargery に顔をごしごしとこすられる時彼女の指輪が顔に当たってたまらなく痛いと言き、またクリスマスパーティの時にはテーブル掛けのところがった角のところに座らせられ、胸の前にあるテーブルと目に突きつけられた Pumblechook の肘との間でしたためる食事にうんざりしている Pip。このように彼は感受性が強く、精神的そして物質的な意味において子供らしい視点を持った子供であると言える。然るにそんな彼自身の持つ子供らしい視点とは大きくかけ離れた心情を、我々は Pip に見る。即ちそれは Miss Havisham の屋敷を訪れた彼が突如として上流階級への憧れを抱くようになるというあの心情のことである。

Pip が初めて Miss Havisham を見た時の印象を見てみよう。

Once, I had been taken to see some ghastly waxwork at the Fair, representing I know not what impossible personage lying in state. Once, I had been taken to one of our old marsh churches to see a skeleton in the ashes of a rich dress, that had been dug out of a vault under the church pavement. Now, waxwork and skeleton seemed to have dark eyes that moved and looked at me, I should have cried out, if I could.⁶

鍛冶家で育った Pip がその人生において初めて関わりを持つこととなった上流階級の御仁が、他ならぬこの気味の悪い屋敷に住むこの世の物とは思えないなんとも不気味な老婆である。その時の彼の心境はむしろ恐怖であっ

たと言えるであろう。その恐怖に続いて彼が経験したのは自分が労働者であることの自覚とそのことに対する非難めいた嘲りである。高慢で美しい Estella が Pip に向かって言う。

‘He calls the knaves, Jacks, this boy!’ said Estella with disdain, before our first game was out. ‘And what coares hands he has! And what thick boots!’ I had never thought of being ashamed of my hands before; but I began to consider them a very indifferent pair. Her contempt for me was so strong, that it became infectious, and I caught it. (90)

この訪問により、Pip は英国社会に蔓延する階級制度を認識し、自らが今いるところの労働者階級から抜け出して紳士になることを決意するということになる訳だが、先にも述べたようにこの動機には今一つ矛盾めいたものを感じざるを得ない。というのも Pip は感受性の強い子供らしい子供であるにもかかわらず、不気味な恐怖を感じた Miss Havisham の居る上流社会にいきなり憧れを抱き、加えて生まれてこの方受けたこともないような侮辱を彼に与えた当の Estella に対して愛情を抱いてしまうのであるから。確かにフロイトの影響を受けた二十世紀以降の文学における子供達においてはこういった心的矛盾は日常茶飯事というところであろう。しかし Blake の「無垢」、あるいは Wordsworth の「自然を敬う心」という子供観に感化された Dickens の子供達は生来無垢なものとして描かれ、取り分け *Oliver Twist* そして *Little Dorrit* にはっきりと認められるように、広く社会全体にはびこって激しく人間性を蝕んでゆく悪に対抗する自然のシンボルなのである。そのような子供が生きたろう人形か骸骨のような老婆のいる社会に対して突如として憧れを抱き、又軽蔑され罵られて好きになるといったようないわば一種のマゾヒズムを持つというのは Dickens の「無垢なる子供」観に矛盾すると言わざるを得ない。というのもこういうマゾヒスティックな子供達が悪の世界において無垢であり続けるのは到底不可能な筈だからである。かかる矛盾に接したとき我々は必然的に Pip に Dickens を重ね合わせて考えねばならないであろう。A. O. J. Cockshut は、この物語は「事件進行中の Pip の直接的な経験と、幼少年期の生活に関する成人した Pip の記憶と判断、そしてそれらの背後に押しつけがましくなく賢明な抑制をもって述べられる

Dickens 自身の考え方との三つの視点からなる」と語っているが、この少年期における Pip の体験に関しては Dickens 自身の体験の裏返しで Pip の体験として語られていると言える。即ちそれは少年期に靴墨工場へ働きに出された経験と青年期における、初恋の人 Maria Beadnell への失恋の体験の二つである。

父親の John Dickens は海軍省経理部の下級官吏であったが、経済観念がなく、派手好きで収入以上の大判振る舞いをしたりする見栄っぱりであったため、家庭は常に貧しかった。それで家計を支えるために十二才の時 Dickens は働きに出される事になったのであるが、その当時の彼のこうむった苦惱は John Forster の *The Life of Charles Dickens* にも表されているように「相当なものであった。更にこの靴墨工場の仲間で、Dickens に仕事を教えてくれた Bob Fagin という名の孤児がいたが、Dickens 自身語っているように¹、その名はそのまま初期の作品である *Oliver Twist* において犯罪者を育成する老獪な悪の親玉 Fagin として使われているのである。この様に幼い Dickens にとっては靴墨工場での労働に加わるという事は犯罪者の仲間に入る事にも匹敵しかねない恥辱であり惨めさであったと言えよう。その後成長した彼は十七才の時に良家の娘であった Maria と恋に落ちたが、当時しかない速記記者であった彼に比べて、彼女の家の方がはるかに格が上であった。そのため彼女の両親によってこの恋は認められず、絶望のうちに Dickens は身を引いたのである。これら少年期と青年期における苦い屈辱的な経験がとりもなおさず Dickens 自身の階級上昇思考の要因となったと考えられるが、とりわけ Maria との失恋は彼の意識の中に、上流階級の女性と結婚してみせることが自身の社会的成功の成就には不可欠であるといったような幾分恨みめいた考えを植え付けてしまったように思われる。例えば *David copperfield* における Em'ly は David の初恋の相手であるが、成人して社会的成功を収めた彼はもはや身分の低い彼女のことは眼中になくなってしまし、加えて言うならば、Dickens は David をして身分は立派で、美しく可愛らしいが、しかし生活力のまるでない空虚な女性 Dola と結婚せしめるにも拘らず、結局は真に彼が得るべきふさわしい相手である Agnes と結ばせるために彼女を死なせてしまうのである。そういった点にやはり彼の上流階級の女性に対する恨みと憧れの入り混じったような複雑な思いを見出すことが出来るであろう。いずれにしてもこのような Dickens の体験の裏

返しが Pip の上流社会とその女性への憧れの引き金となるお屋敷訪問の背後にあると考えられる時、Estella に対する Pip の気持ちも又立身出世とは切り放すことの出来ないものであると考えざるを得ない。即ち、先に述べた Gatsby にとっての Daisy が彼の究極の目的物であり、夢であり、彼が努力して果たした立身出世はひたすら彼女を得るための手段に過ぎなかったのに対し、Pip にとっての Estella は上流階級であるが故にその名の通りスターである女性、極端な言い方をすればむしろ自身の立身出世のためのいわば手段としての女性であったということである。Gatsby の立身出世への願望がロマンティズムに基づいているのとは対照的に、Pip のその願望はスノッパリーそのものなのである。そして、こうして芽生える事となった Pip のスノッパリーは遺産相続の見込みを受けるに至って更に根強いものになっていく。というのも遺産相続がほぼ保証された今となっては、Pip の上流社会進出の為の努力は積極的なものから消極的なもの、つまり遺産の贈り主であると勝手に思い違いをしている Miss Havisham に気に入られるようにするという努力になってしまうからである。そして遂には、育ての親であり幼少の頃からの長年の親友であり続けた Joe が、ロンドンの下宿先に訪ねて来てくれた際に心に抱いてしまうあの思い “If I could have kept him away by paying money, I certainly would have paid money (240)” にまで至ってしまうのである。こうして Pip は今やこの上無い程の俗物家に成り果ててしまった。しかし突如として彼の身に大きな変化を与え、そしていたるところに皮肉のムードが漂うこの物語においても最大の皮肉となるところのあの事実が Pip に知らされる。即ち Pip への遺産譲渡者が実は彼が幼少の時に助けてやった囚人の Magwitch であったという事実である。Pip にとって上流階級へと出世することは労働的下層階級から完全に足を洗ってしまうこと、言い替えるならば塀のこちら側からむこう側へと飛び越えてしまうことであり、そこはまた物質的にも精神的にも労働者階級とは比較にならないほどに発展したパラダイスの如き世界であったはずである。それが裏にまわれればその塀にはちゃんと裏口がついていて、お金さえ出せば下層階級どころか犯罪者までもそこから自由に出入り出来るようになっていたのである。Pip は金の力を実感した。以前に仕立て屋の小僧が Pip に無作法を働いたために主人の Trabbs にぶちのめされるのを見たときに感じた以上の金の威力を彼は感じたはずである。又、金は人を選ばないという事も実感したことであ

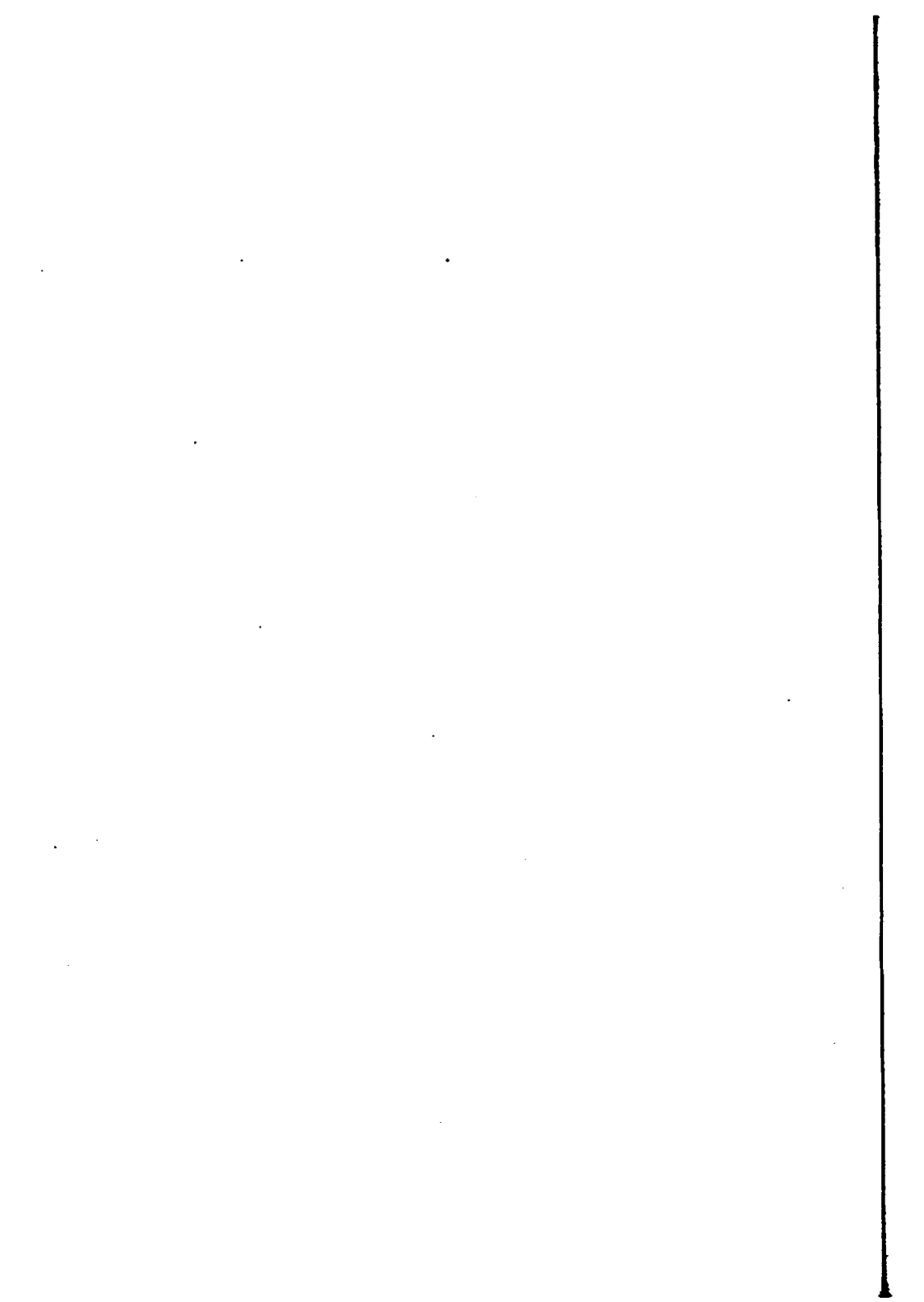
ろう。Pipは目が覚めた。Joe に対して今までの非礼を心の中で詫びた。傷ついた Magwitch に愛情ある看護をしてやった。遺産相続は自ら放棄した。そうして Pip はようやくスノッパリーから抜け出し道徳的成長を遂げた、と言いたいところだが果たしてそうであろうか。というのもここ大団円に至ってまたもや Dickens が大きく顔をだすことになるからである。

遺産の放棄、Magwitch の捕縛、そして彼の死といった一連の事件に片が付いた直後、Pip は高熱を伴う病気に陥る。無論これは Dickens のよくやる象徴で、*Oliver Twist* が犯罪者の仲間から抜け出して上流階級の一員として暮らす方向に向かうときに彼が熱病を患ったのと同じ伝で、Pip が新しい人生へと踏み出す為の布石となるものであろう。そうして Joe に看護を受けすっかり快復した彼は、Biddy に結婚を申し込むためにいそいそと故郷の田舎道を辿るということになるのだが、ここで注目すべきは Pearlman も指摘するように¹⁹ 労働者階級の娘である Biddy への求婚には今までの自らの行いに対する償いの意図がはっきりと窺われるということであり、その意味においては彼の求婚の決意にはまさしくスノッパリーが根底に潜んでいると考えざるを得ない。金銭と階級意識とはスノッパリーを語るのに切っても切れぬものであり、金と階級をテーマにしたこの物語も、Pip の自主的な遺産相続の放棄によって金銭とそれにまつわる階級意識もまた陵駕したかのごとくに思われたが、しかし先に述べたように Dickens 自身の階級意識は、自らの社会的成功がそれに基づいている以上はその念頭から去る事はないようである。がしかし Pip と言うよりは Dickens 自身のその階級的意識が最も顕著に表れるのは、償いとしての Biddy への求婚ということよりもむしろ、二人の結婚は Joe が既に彼女に求婚をしていたために成就されないということ、即ち、労働者階級の娘との結婚は阻止されるということにある。そして物語の最後におけるこの Pip の期待外れによる皮肉のパターンにこそ冒頭に述べたように、この小説の標題に付された "great" が皮肉の意味しか持ち得ないことにつながっていると言えよう。Pip の道徳的発展が成就された筈の、その後における皮肉であるからこそ、これはより深い意義と印象をもたらすことになるのである。なるほど確かに、結末において Pip とそして今となっては上流階級どころか、かつての囚人であったところの Magwitch の娘に過ぎない Estella とのハッピーエンドが暗示されてはいる。しかしここで付記しておかねばならないのはこの結末が、先輩作家であっ

た Edward Bulwer Lytton に勧められて変更されたものであるということである。最初の結末では二人は結ばれてはいない。二人を結び付けるというこの結末に Dickens 自身余り乗り気では無かったであろうということは、物語の最後のセンテンス “...I saw no shadow of another parting from her.” (493) というなんとも曖昧にしか意味を成し得ない言い回し “からも窺えるであろう。そうして田舎に戻る事のない Pip は労働者階級に戻らないと同時に道徳的成長をも放棄してしまったかのようである。The Great Gatsby において道徳的成長を象徴する Nick の Gatsby に対する言葉 “They’re a rotten crowd, — You’re worth the whole damn bunch put together.” (141)、また、東部の金持ち階級を代表する人物である Tom Buchanan に別れの場面で嫌悪を抱きながらも握手をしてやるその時の彼の心情 “I shook hands with him; it seemed silly not to for I felt suddenly as though I were talking to a child.” (161-2) からも Nick の、ひいては Fitzgerald 自身の金持ち階級に対する軽蔑、というよりむしろ、彼等とは一歩違う次元にいるんだとでも言いたげな優越感さえ窺えるのである。又 Gatsby の悲惨な死といえども、それは彼に対する否定ではなく、本来は自身が殺される筈のところであるにもかかわらず、Gatsby が殺されるように仕向けた Tom の、言い替えれば東部金持ち階級の不道徳さそして下劣さを象徴するものであると言えるのではないだろうか。つまりところ The Great Gatsby における “great” が皮肉を含みながらも真実の “great” に成り得るのは既に述べた Gatsby 自身のロマンティシズムに加えて、最終的に Nick が持つに至った金持ち階級に対しての道徳的優越感とに由来しているのである。一方英国という特異な階級制度を持つ国に生まれ、しかも中産階級ぎりぎりのところにいたために屈辱的な辛酸を二度も味わわねばならなかった Dickens にとっては、彼自身、紳士など金さえ出せば誰にでも容易に成れるものだと社会に対して大いにうそぶきながらも、心の底では常に階級意識から逃れる事の出来ないでいた彼自身のスノッパリーが、Great Expectations における “great” にアイロニカルなムードを前面に押し出させてしまう要因となったといえるであろう。がしかし彼の偉大な作家としての成功がそのスノッパリーにあったことも又事実ではある。

注

1. Angus Calder, Introduction, *Great Expectations*, by Charles Dickens (London: Penguin Books, 1985), 15.
2. 野崎孝、『フィッツジェラルド』、(研究社、1966)、102—103.
3. 野崎 101.
4. Scott Fitzgerald, *The Diamond as Big as the Ritz and Other Short Stories*(New York: Charles Scribner's Sons, n.d.) 211.
5. Scott Fitzgerald, *The Bodley Head Scott Fitzgerald*, 6 vols. (London: Bodley Head, 1966) 2: 20. 以下テキストのページ数は本文中の括弧内に記す。
6. Charles Dickens, *Great Expectations* (London: Penguin Books, (1985) 87. 以下テキストのページ数は本文中の括弧内に記す。
7. 宮崎孝一、『ディケンズ』、(英潮社新社、1988)、111.
8. John Forster, *The Life of Charles Dickens*, 2 vols. (London: J M. Dent & sons Ltd., 1948) 1: 22.
9. Steven Marcus, *Dickens from Pickwick to Dombey* (London: Chatto & Windus, 1965) 364.
10. E. Pearlman, "Inversion in *Great Expectations*" *Dickens studies Annual* 198: 200.
11. "For the later version hints at the buried meaning: ...at this happy moment, I did not see the shadow of our subsequent parting looming over us."496. Angus Calder, Appendix, *Great Expectations*, by Charles Dickens (London: Penguin Book, 1985) 496.



英語の中間文について*

小林 敏彦

SYNOPSIS

This paper deals with middle constructions in English in the framework of Government and Binding Theory. Stroik (1992) presents a movement analysis on this construction, but there is a crucial problem in his argument concerning PRO. I will argue that the adverbial elements in middle sentences play a syntactically important role for the Agent θ -role to move to the subject position of the sentence. In the course of my argument, it is shown that there is a parallel structure between the passive and the middle sentences in English.

1. はじめに

(1) に示す英語の中間文には、i) 主題項が主語になる、ii) 外項、つまり動作主項が明示的には生じない、iii) 通例、副詞要素が伴わなければならない、という特徴がある。

- (1) a. This book sells well.
b. These chickens kill easily.
c. Bureaucrats bribe easily.

Fagan (1988, 1992) や Roberts (1986) では、このような中間文の外項 (Agent) は語彙的に飽和 (saturation) がなされると仮定し、その θ 役割は投射原理 (Projection Principle) によって、構造的に現れないとする。¹ したがって、このような語彙的分析では、中間文には項が1つしか存在しないことになるが、そうすると、Stroik (1992) が挙げる (2) のようなデータが説明できない。

- (2) a. Books about oneself never read poorly.
 b. Letters to oneself compose quickly.
 c. Arguments with oneself generally end abruptly.

(2) は中間文の主語内に照応形が存在することを示している。「照応形はその統率範疇内で束縛されなければならない」という束縛条件 A に従うなら、これらの照応形は束縛されているはずであり、その先行詞が存在しなければならない。² したがって、このような主語内の照応形を説明するためには、それに対する非明示的な先行詞を仮定しなければならず、中間文には2つの項があると考えなければならない。また、中間文に主題項以外の項が存在するということは(3)の能格文と中間文の違いによっても示される。³

- (3) a. The boat sank all by itself.
 b. *The bureaucrats bribe easily all by themselves.

(Keyser & Roeper (1984: 405))

Keyser & Roeper (1984) は、(3) の *all by itself/themselves* は 'totally without external aid' を意味し、'without aid' という概念は (3a) の能格文の持つ非動作主性 (agentlessness) とは適合するが、(3b) の中間文に存在すると考えられる非明示的な動作主とは不適合であると説明する。これらの事実より、中間文に於いて非明示的な動作主の存在を仮定するのは妥当であると思われる。

2節では、(2) のようなデータを説明するために移動分析をとる Stroik (1992) の分析を概観し、その問題点を修正し、さらに3節で中間文に存在する副詞要素とこの構文との関係を考える。

2. 中間文における外的 θ 役割

Stroik は (2) のデータから、中間文には外的 θ 役割が存在するという。この外的 θ 役割は、PRO か IMP のどちらかであると考えられるが、彼は、Roberts (1986) の示す3つの基準(4)を適用することによって、中間文の外的 θ 役割は PRO が担うと仮定する。

- (4) Roberts's three diagnostics for distinguishing PRO from IMP.⁴
- i. IMPs cannot bind anaphors, but PROs can
 - ii. IMPs cannot be controlled, but PROs can, and
 - iii. IMPs cannot control into adjuncts, but PROs can.

(2) の各文では照応形は束縛されていることになり、(5) では、それぞれの空範疇 (EC) は全てそれと同一指標を付与されている NP にコントロールされている。そして (6) は、空範疇が実際に adjunct 内の PRO をコントロールすることを示している。

- (5)
- a. Mary_i expects the Latin text she was assigned to translate quickly EC_i.
 - b. Mary_i believes that they think that arguments with herself generally end abruptly EC_i.
 - c. John_i expects that the book he just bought will read quickly EC_i.
- (6)
- a. Most physics books read poorly EC_i even after PRO_i reading them several times.
 - b. Potatoes usually peel easily EC_i after PRO_i boiling them.
 - c. Bureaucrats bribe best EC_i after PRO_i doing them a favor or two.

このように Stroik が Roberts (1986) の示す基準 (4) に従って、中間文の外的 θ 役割を担っているのは PRO であるとするのは妥当であると思われる。

次に、PRO は統率されてはならないので、Stroik はこの外的 θ 役割は中間文の構造的に統率されない位置に生じなければならず、A' 位置にあるとする。こう考える根拠として、Larson (1988) の "argument demotion の原則" (7) に従い、中間文の外的 θ 役割が VP によって付与されるのであれば、この θ 役割は IP の主語から VP の adjunct に降格してもよいとしている。したがって、彼の枠組みでは、(8a) は (8b) の S 構造を持つことになる。

- (7) Principle of Argument Demotion (Larson (1988)):

If A is a θ -role assigned by X^i , then A may be assigned (up to optionality) to an adjunct of X^i .

- (8) a. Bureaucrats bribe easily.
 b. [_P bureaucrats [_I I [_{VP} [_{VP} bribe easily] PRO]]]

彼は (8b) の構造は中間文について次の事実をとらえることができるとしている。

- (i) 中間動詞は2つの項すなわち、〈Agent, theme〉をとる。
 (ii) 中間動詞の外的 θ 役割 (Agent) を担うのは PRO である。
 (iii) 外的 θ 役割は表層主語として明示的には現れない。

さらに、(8b) に対応する D 構造は次の (9) の表示を持つとしている。

- (9) [_P e [_I I [_{VP} [_{VP} bribe bureaucrats easily] PRO]]]

その根拠は、中間文の照応形の束縛にあるとしている。つまり、主題項が D 構造で主語位置に生成されるとすれば、(10a) の主語内の照応形は先行詞を持つことが出来なくなる。というのはその構造だと、照応形を c 統御する NP がないからである。

- (10) a. Books about oneself never read poorly.
 b. [_P e [_I I [_{VP} [_{VP} never read books about oneself poorly] PRO]]]

以上が Stroik の議論であり、第1節で提示した (2) のデータを説明することができるわけである。

しかしながら彼の議論には以下に示す2つの問題点がある。まず第1に、May (1985) の付加構造に関する仮説 (11) に従えば、(10b) では VP は障壁にはならず、PRO は I に統率されることになってしまう。

- (11) α is dominated by β only if it is dominated by every segment of β .

すなわち、(12) のような、 β に付加されている α を持つ付加構造では、 α は β に支配されておらず、ある範疇はそれが全ての β のセグメントによって支配されている場合にのみ β に支配されるというわけである。

$$(12) \quad [{}_{\beta} \alpha [{}_{\beta} \dots]]$$

そうすると、障壁に関する定義 (13) と (14) に従えば、(9) あるいは (10b) では、VP は L-mark されていないが PRO を支配していないので PRO に対する障壁にならない。

(13) γ is a BC for β iff γ is not L-marked and γ dominates β .

(14) γ is a barrier for β iff (a) or (b):

a. γ immediately dominates δ , δ a BC for β ;

b. γ is a BC for β , $\gamma \neq \text{IP}$.

そして (15) の統率の定義に従うと、I は PRO を統率することになる。

(15) α governs β iff α m-commands β and every barrier for β dominates α .

一般的に採用されている May の (11) の定義に従うと、⁵ PRO を (9) または (10b) の位置に生じさせることは出来ないということになる。第 2 に、Stroik は PRO が A' 位置に存在すると考えているが、(10b) に於いて、照応形は PRO に A 束縛されているのではなく、A' 束縛されていることになり、束縛条件 A の違反になる。この 2 つの問題を解決するために、本稿では、中間文の外的 θ 役割を担う PRO は VP の指定辞に存在し、またその VP の指定辞は Rosen (1990) に従い、A 位置であると仮定する。⁶ そうすると、(10a) に対応する構造は (16) のようになる。

$$(16) \quad [{}_{\text{P}} \text{e} [{}_{\text{I}} \text{I} [{}_{\text{VP}} \text{PRO} [{}_{\text{V}'} \text{sell the book about oneself easily}]]]]$$

この構造だと、VP が PRO に対する障壁になっており、したがって PRO は I によっては統率されていない。だが、(16) の構造でも PRO は V' の要

素によって統率されてしまう。この問題は (15) の統率の定義を m 統御ではなく c 統御によるとすれば、PRO は統率されなくなり解決できる。次に第2の問題点について見てみると、(16) の構造に於いて、その VP の指定辞は A 位置であると仮定すれば、PRO は *oneself* を A 束縛することになり、束縛条件に違反することなく解決することができる。

以上 Stroik (1992) の分析の問題点に関して、(16) の構造を考えることによって解決できることを見た。

3. 中間文と移動

本節では、中間文に於いて主題項が主語位置へ移動することについて Stroik (1992) と Keyser & Roeper (1984) の議論を概観し、それらの問題点に対する代案を示す。

Stroik は中間文に於ける主題項の主語位置への移動は、Infl と V が同一指標を付与されないことによって生じるとする。Roberts (1986) は、中間動詞は Infl と V の同一指標付与がなされないことによって状態化された動詞であるといい、Stroik はこの考えに従って、V は Infl と同一指標が付与されている場合に限り対格を付与できると仮定する。つまり、中間文では Infl と V の同一指標付与がないので、動詞はその目的語位置に格を付与することが出来ず、したがって、目的語は格を受けるために主語位置へ移動しなければならないというわけである。それで、(10a) は (17) の S 構造を持つとする。

(17) [_P [books about oneself]_i [_I I [_{VP} [_{VP} never read t_i poorly] PRO]]]

しかし既に2節で述べたように、この構造は PRO が統率されることになるので認められない。またこの構造では中間文と副詞要素の関係も何等示されておらず、この点でも不十分である。

次に、Keyser & Roeper (1984) の議論を見てみることにする。彼らは、中間文は Chomsky (1981) で示されている受動文の特性と非常によく似た特性があるとして、Chomsky が提案した受動文に対する次の (18) の操作によって中間文を説明しようとしている。

- (18) a. [NP, S] does not receive a θ -role.
 b. [NP, VP] does not receive Case within VP, for some choice of NP within VP.

つまり、(19) が示しているように、中間文は受動文と同様に、NP が格を持たないで目的語位置にあるが、これは Case Filter に違反していることになり、(20) のように、この NP は格を受けることのできる位置（つまり主語位置）に移動しなければならないというわけである。

- (19) a. *It was bribed the bureaucrats.
 b. *It bribes bureaucrats easily.
 (20) a. The bureaucrats were bribed.
 b. Bureaucrats bribe easily.

以上のことから、Keyser & Roeper は (21) のように結論づけている。

- (21) [middle formation] is fully analogous to passive formation, where both lexical rules of morphology and a syntactic movement rule are needed to complete the operation. Although middles have no overt morphological characteristics, they still require lexical operations on their thematic and case structures.

(Keyser & Roeper (1984: 402))

彼らはさらに、中間文には非明示的な動作主 (implicit agent) があるが、(22) のように *by*-句で動作主を表すことが出来ないという事実を、(23) に示す対応関係が中間文にはないということから、中間文の非明示的な動作主と受動文の非明示的な動作主は別の概念であるとして説明しようとする。⁸

- (22) *Bureaucrats bribe easily by managers.
 (23) a. John was hit.
 b. John was hit by Bill.

Keyser & Roeper は (24) のイタリア語との類推から、英語の中間文には

(25a) の D 構造のように明示的には生じない抽象的な *si* clitic があり、これが目的語に与えるべき格 (つまり対格) と動作主役割を吸収すると考えている。したがって、(25b) のように *the apples* は主語位置へ移動しなければならない。

- (24) a. Le mele *si* mangiano.
 b. *Si* mangiano le mele.
- (25) a. [_{NP} e] eat *si* the apples
 b. [_{NP} The apples], *si* eat t_i

以上が彼らの議論であるが、Stroik 同様、このような説明では (19b) に (18a), (18b) を適用してできたはずの (20b) に副詞が生じていることが何も示されていない。つまり Stroik (1992) でも Keyser & Roeper (1984) でも、(26) と (27) の対応によって示される中間文と副詞要素との関係をとらえることは全くできていない。

- (26) a. Bureaucrats bribe easily.
 b. The wall paints easily.
 c. Chickens kill easily.
 d. The floor waxes easily.
- (27) a. *Bureaucrats bribe.
 b. *The wall paints.
 c. *Chickens kill.
 d. *The floor waxes.

さらにまた、この問題は、2 節で示した (16) の構造でも解決することはできない。そこで、本稿では、この (16) の構造をさらに、(28) のように修正する。

- (28) [_P e [_I I [_{VP} PRO [_V [_V sell easily] [_{NP} the book about oneself]]]]]

(28) の構造では、動詞 *sell* と目的語 NP の間に *easily* が入っており、(29)

に示す受動文と平行的な構造になっている。

(29) [_{NP} e] was hit-en John.

つまり、受動文では受動形態素 *-en* によって NP に格が付与されなくなるように、中間文では (29) のように副詞要素 *easily* が存在することによって、NP に格が付与されなくなる。それで、格を受けるために主語位置に移動するわけである。このように考えると中間文で副詞が伴わなければならないことも統語的に説明されるし、⁹ また Keyser & Roeper のようにイタリア語からの類推によって、抽象的な *si* clitic の存在を英語で仮定しなくてもすみ、中間文と受動文の平行性も自然にとらえることができる。

4. 結論

本稿では、はじめに、中間文の主語内の照応形に対して、これを束縛する外的 θ 役割を担う PRO の位置について、Stroik (1992) の議論を修正し、次に中間文と副詞の関係から中間文の D 構造は (28) のようになるということを示した。この (28) の構造が正しいとすると、中間文に動作主役割を担う要素があるということ、この動作主役割は明示的には生じないということ、そして中間文で副詞が統語的に伴わなければならないということが明確になる。

この (28) の構造は中間文と受動文の平行性についてとらえることができるが、中間文の副詞要素の振る舞いについての疑問が残る。つまり、(28) で NP が格を付与されないというのは、受動形態素 *-en* が格を吸収するのと同じように、中間文の副詞要素が格を吸収するためであるのか、それとも単に隣接条件 (Adjacency Condition) の違反になるためであるのか、ということである。この問題については今後の研究が必要である。

注

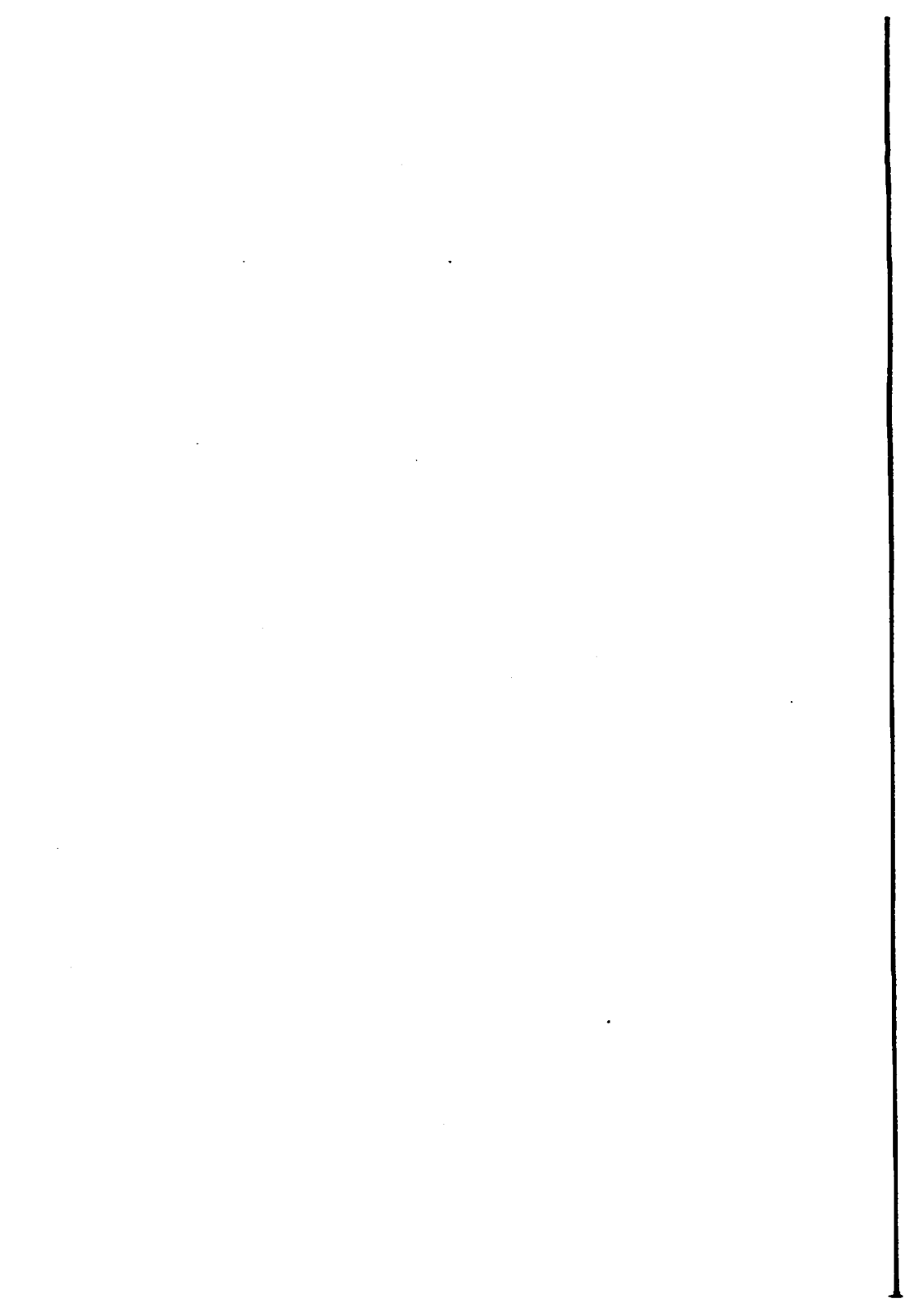
*本稿は、甲南英文学会第8回研究発表会（於甲南大学，1992年6月27日）での発表

原稿を加筆修正したものである。その際、貴重なコメントをいただいた橋矢好弘教授、司会を務めていただいた岩田良治先生に感謝します。また、北峯裕士氏、福田稔氏には、本稿の議論をまとめる上で、特に有益な助言をいただいた。この場を借りてお礼を申し上げます。

- 1 Fagan (1988, 1992), Roberts (1986) に対する批判については, Stroik (1992) を参照されたい。
- 2 (2) にあるような *oneself* について, Quirk, et al. (1985: 357) は “When a non-finite clause or a nominalization has an implied human subject of the most indefinite kind (‘someone or other ’), the reflexive *oneself* ... may be used” と述べて, implied subject があることを示している。
- 3 本稿では, 能格文については取り扱わない。
- 4 Roberts は IMP(licit) を “structurally present non overt logical subjects of passives.” と定義している。また, 彼は IMP と PRO にはさらに, (ii) のようなデータから, (i) に示す違いがあるとする。
 - (i) IMPs cannot be objects of predication, but PROs can.
 - (ii) a. *The room was left IMP_k sad_k.
 - b. They expected PRO_k to leave sad_k.
 これに対して, Stroik は, (iii) のような文では IMP は predication の object になるとして, この Roberts の基準は信頼できないとしている。
 - (iii) a. That painting was painted IMP_k blindfolded_k.
 - b. I can tell that this letter was written IMP_k {in a good mood}_k.
 - c. This bank-job wasn't done IMP_k alone_k.
- 5 Chomsky (1986) でも, この May の定義に従っている。
- 6 VP の指定辞が A 位置であることに関しては, Rosen (1990) を参照。
- 7 (16) の構造に対して, 統率を c 統御によって定義することで解決できるという考えは, 北峯裕士氏によって示唆されたものである。
- 8 中間文と受動文の非明示的な動作主の区別については, 2 節で見たように Stroik も考えているところである。
- 9 中間文には以下のように副詞要素を伴わないものもいくつか存在するが, それらをどのように扱うかについては今後の研究課題としたい。
 - (i) a. This dress buttons.
 - b. This dress won't fasten.
 - c. Glass recycles.
 - d. 15" breast plate ties on. (Fagan (1992: 57))

参考文献

- Burzio, L. (1986) *Italian Syntax*, Reidel Publishing Company.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*, MIT Press.
- Fagan, S. (1988) "The English Middle," *Linguistic Inquiry* 19, 181-203.
- Fagan, S. (1992) *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Keyser, S. J. and T. Roeper (1984) "On the Middle and Ergative Constructions in English," *Linguistic Inquiry* 15, 381-416.
- Larson, R. (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- May, R. (1985) *Logical Form*, MIT Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- Roberts, I. (1986) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*, Foris, Dordrecht.
- Rosen, S. (1990) *Argument Structure and Complex Predicates*, Garland.
- Stroik, T. (1992) "Middles and Movement," *Linguistic Inquiry* 23, 127-137.



縮約生起と英語のリズム

西原 哲雄

SYNOPSIS

It is my purpose in this paper to examine the conditions on the occurrences of the contractions including auxiliary reduction and of the *to*-contraction. In the former analyses, these contractions were treated from syntactic, semantic, and phonological viewpoints, and they did not decide whether these contractions belonged to syntax, semantics, or phonology. Culicover & Rochemont (1983) treat the contractions as part of phonology because they have much to do with English rhythm (SW(WS)). The conditions on the occurrences of the contractions are defined by Switch Rule (SR) based on English rhythm. But there are some cases that can not be happily handled as their theory expects to. To solve this problem, I suggest a Revised Switch Rule (RSR) restricting the domain of the constructions to Intonational Phrase (IP) suggested by Nespor & Vogel (1986) and show that it adequately explains the conditions on the occurrences of the contractions.

0. 序

本稿では、縮約(contraction)といわれるもののうち、助動詞縮約(Auxiliary Reduction, AR)と、*to*縮約(*to*-contraction)を扱う。ARとは、*is, has* → 's, *have* → 've, *will* → 'll, *would, had* → 'd, *are* → 're, *am* → 'mのように助動詞が縮約され、先行する語に付加される現象をさし、*to*縮約とは *want to* → *wanna*, *going to* → *gonna*, *have to* → *hafta* などのように、*to*不定詞の *to* が縮約され、先行する(助)動詞に付加される現象をさす。この縮約の生起には、今までにさまざまな分析、提案がなされてきている。しかし、それらは、統語的、音韻的、意味的、談話的などさまざまな観点から捉えられているものであり、一貫した分析はなされていなかった。'

この縮約に深くかかわっているものに、従来の分析でも指摘されてきた助動詞の後続（あるいは先行）要素が変形操作などで移動，あるいは削除された後に残る消去位置 (deletion site)² がある。本稿では，この消去位置と英語のリズム（音韻論的観点）との関係によって，縮約の生起条件が規定できることを指摘する。さらに，縮約の生起条件に音律音韻論 (Prosodic Phonology, PP) の音律構造 (Prosodic Structure, PS) が必要であることも併せて指摘したい。

1. 助動詞縮約の生起条件

最初に，従来の縮約の生起条件についてどのようなものが指摘されているかを見る。King (1970) は助動詞の後続要素が Wh 移動や消去変形などによって削除された場合，縮約は阻止されるとしている。

- (1) a. I wonder where Gerald [is/*'s] ____ today.
b. Who is hungry? John [is/*'s] ____ most of the time.

同様に，比較削除変形 (Comparative deletion) をうけた場合も，縮約は阻止される。

- (2) a. Sam's richer than Bill [is/*'s] ____ these days. (Lakoff: 1970)
b. Murphy's taller than Gabe [is/*'s] ____ . (Wood: 1979)

以下に，関係詞化 (Relativization)，話題化 (Topicalization)，複合名詞句移動 (Complex NP shift) などの場合を示す。

- (3) Sandy is polite to strangers, which I doubt very much that Terry [is/*'s] ____ . (Sag: 1978)
- (4) They're not Communists, but Socialist, they [are/*'s] ____ . (ibid.)
- (5) a. Jack [is/*'s] ____ to Mary the dearest friend in the world. (Kaisse: 1983)

b. Mary [is/*'s] ___ after Jane the best athlete in the team.

(高橋: 1986)

これらの事実から、縮約は助動詞の右側に消去位置が存在する場合には阻止されるものと思われる。また、右側に消去位置がなくても、Kuno (1977) が示すように助動詞 (be) が同一的 (identificational), すなわち A=B の意味を持つ場合は、その助動詞の後ろに音調の句切りがあり休止 (pause) が生じるために縮約は生じない (# は休止を示す)

- (6) a. His thought [is/*'s] # to come here tomorrow.
 b. His plan [is/*'s] # to come here tomorrow.
 c. His hobby [is/*'s] # going to parks.

同様に、挿入節形成 (Parenthetical formation) の場合にも、以下に示すように縮約は阻止されることになる。この場合も、(6) と同じように消去位置は存在せず、挿入節と母型文との間に休止が存在するためであると考えられる。³

- (7) a. Here's something that [will/*'ll] # I think # surprise you.
 b. John [is/*'s] # they say # a bastard. (Lakoff: 1972)

以上、消去位置と休止が、助動詞縮約を阻止する要素であることを見てきたが、次節では、to 縮約について見ることにする。

2. to 縮約と格理論

ここでは、to 縮約のうちでも、want to → wanna を中心に見ていくことにする。(8) に示すように、want と to の間に消去位置が存在する場合には、縮約は許されない。

- (8) a. Who do you want ___ to win the election?
 a'. Who do you *wanna win the election?

一方, (9) の場合には, want と to の間に消去位置がないために縮約が可能であると説明されてきた。

- (9) a. Who do you want to talk to ____?
a'. Who do you wanna talk to?

しかし, 厳密には (9) の文頭の who は直接, 文頭に移動されるのではなく, want と to の間にある Comp の位置を経由して文頭に移動されるので, Comp 内に痕跡 e_2 が存在することになり, これが縮約を阻止しそうに思われる。しかし, この痕跡は, IP 内の PRO とともに格標示をうけないので縮約の障害にはならないと説明される。((10)を参照)

- (10) a. Who do you want ____ to talk to ____?
a'. Who do you want [_{CP} e_2 [_{IP} PRO to talk to e_1]]

一方, (8) も厳密に表示すれば (11) のようになる。

- (11) a. Who do you want ____ to win the election?
a'. Who do you want [_{CP} e_2 [_{IP} e_1 to win the election]]

(11) -a' の e_1 は格を標示されるので to 縮約は適用されないと説明される。しかしながら, この格標示の区別では縮約の生起を正確に規定することはできない。例えば, 「格標示された痕跡」が縮約を阻止するなら, (12) の消去位置に残された痕跡は先行する動詞から格付与を受けており, 縮約は阻止されるはずであるが, 実際には阻止されない。'

- (12) a. The man (whom) you met ____'s just arrived. (has)
a'. [The man (whom) you met e] 's just arrived. (Kaisse:1983)
b. The woman that you saw ____'s my sister. (is)
b'. [The woman that you saw e] 's my sister. (Wood: 1979)

また, 「格標示されない痕跡」も常に, 縮約を許すわけではない。(13) に示

された例では縮約は阻止される。例えば、(13a) の場合であれば、文頭の助動詞は主語の後ろの位置から移動したもので、I と have の間に消去位置があり、そこに残された痕跡は当然、格標示はされていないので縮約が可能であるはずであるが、実際には縮約は許されない。

- (13) a. Should I ___ |have/*'ve| called the police?
 b. Will we ___ |have/*'ve| finished by 4 o'clock?
 c. Would you ___ |have/*'ve| wanted to come with me?
 d. Could you ___ |have/*'ve| done something to help?

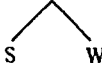

(Radford: 1988)

(12), (13) からすると、格標示の有無によって行う従来の縮約生起の説明は不十分なものである。しかし、ほとんどの例において、消去位置が存在するので、消去位置や痕跡の格付与が縮約にかかわっていることは否定できないように思われる。次節では、別の観点からそのかわり方を考察する。

3. 消去位置と英語のリズム

文の生成は、統語（文法）規則によって行われるが、実際には、リズムも関与していると思われる。例えば、(14) のように、能動態では to を伴わない使役動詞 make が受動態においては to という余剰的な機能語を伴う。これは、音韻論的観点からすると (15) に示されるような英語の基本的なリズム (SW(WS)) を整えるためと考えられる。(大文字は S (強強勢), 小文字は W (弱強勢) を示す。)

- (14) a. He MADE her GO.
 b. She was MADE to GO. [S W S]
 c. *She was MADE GO. [*S S]

- (15) a.  b. 

このように、リズムと文生成は深く関係しており、この観点から縮約の生起条件を規定しようとしたのが Culicover & Rochemont (1983) である。彼らは、(16) に示す (リズム) 交換規則 (Switch Rule, SR) で縮約の生起を説明しようとした。


(16) (リズム) 交換規則 (Switch Rule: SR)

$[_s W [_s e]] \rightarrow [_s S [_w e]]$, where $[_s e]$ is designated terminal element.

(Culicover & Rochemont 1983: 143)


この規則は消去位置に残され音韻的空要素 (Phonologically null element: [e]) には、S ではなく、W が付与され、音韻的空要素に隣接している語は、英語のリズムを整えるために、S が付与されることを示している。例えば、(17) では where が移動したあとの消去位置は音韻的空要素なので、W が付与され、先行している is には S が付与されることになるので縮約は阻止されると予測される。

(17) I wonder where the party $\{is/*'s\} \frac{\quad}{S \quad W}$ tonight.




(6), (7) のような休止が右側にある場合も、休止が音韻論的空要素なので W が付与され、先行する助動詞が S を付与されることになり縮約は阻止される。

(18) a. (=6a) His thought $*'s \frac{\#}{S \quad W}$ to come here tomorrow.



b. (=7b) John $*'s \frac{\#}{S \quad W}$ they say # a bastard.



しかし、(13) の例は、(17), (18) とは異なり、助動詞 have の左側に消去位置が存在するので、(16) の SR では説明ができない。したがって、左側の

消去位置も取り扱えるように、(19)のように改定する。

(19) (リズム) 交換規則 (Switch Rule: Revisited)

$$\left\{ \begin{array}{l} [{}_i W [{}_j e]] \rightarrow [{}_i S [{}_j e]] \\ [{}_i [{}_j e] W] \rightarrow [{}_i [{}_j e] S] \end{array} \right\}, \text{ where } |, e | \text{ is a designated terminal element.}$$

(19)に従えば、格理論では説明が不可能であった(13)の例が(20)に示すように、説明可能になる。

(20) a. Should I W |*ve/have| called the police?



b. Will we W |*ve/have| finished by 4 o'clock?



しかしながら、逆に、(9), (10)のような want と to の間に PRO が介在している場合は、(21)のように to に S が付与され、縮約が阻止されるという誤った予測をしてしまうことになる。

(21) * Who do you want PRO to talk to?



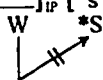
(1) から (5) で問題となる空所は先行する語が (助) 動詞 be なので格付与されることの絶対にあり得ない位置 ([] で示す) にある。これは、格付与される痕跡 ([+Case] で示す) や休止 ([#] で示す) とともに、文中に実在する ([+entity] で示す) ものとして1つにまとめられる。そして、格付与される可能性のある位置にあるが、その性質[-Case] の故に、格付与も音形もなく、文中に実在しない ([-entity] で示す) ものと考えられる


これは、(22) の同じ Primary Node 階層に属する格標示された痕跡が2つの異なったふるまいをしているためである。これを、解消するために、西原(1992)で to 縮約の適用範囲とした⁶ IP (Intonational Phrase) を (23) の定式に加え、(26) のように改定する。


(26) 改定 (リズム) 交換規則 (Revised Switch Rule: RSR)

$$W \rightarrow S / \left\{ \begin{array}{c} \text{_____} \left[\begin{array}{c} w^c \\ \text{Pr. Node} \end{array} \right] \\ \left[\begin{array}{c} w^c \\ \text{Pr. Node} \end{array} \right] \text{_____} \end{array} \right\} \dots]_{IP}$$

(26) は (12a) を次のような正しい結果に導く。(27) を参照) さらに、to 縮約についても (28) に示すように、説明が可能になる。

(27) [The man]_{IP} [(whom) you met _____]_{IP} ['s just arrived]_{IP}
 ((26) not applied)

(28) a. [Who]_{IP} [do you want PRO to talk to _____]_{IP}
 ((26) not applied)


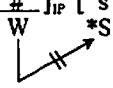

b. [Who]_{IP} [do you want]_{IP} [e to win the election]_{IP} (*wanna)
 ((26) applied)

また、(7) の例などは挿入節の前にできる休止の前では縮約は阻止されるが、後にできる休止の後ろでは阻止されない事実が観察される。






(29) a. (=7b) John [is/*'s] # they say # a bastard.
 b. John # they say # 's a bastard.

(23) では (29b) を誤った結果に導くが、(26) は適切な結果を導くことにな

る。

- (30) a. John # they say # *'s a bastard. (*'(23) applied)

- b. [John #]_{IP} [they say #]_{IP} ['s a bastard]_{IP}
 ((26) not applied)
- c. [John *'s #]_{IP} [they say #]_{IP} [a bastard]_{IP}
 ((26) applied)

(26) に示した RSR がその他の例も適切に説明できることを以下に示すことにする。

- (31) a. (=2a) [Sam's richer]_{IP} [than Bill *'s these days]_{IP}
 ((26) applied)
- b. (=5a) [Jack *'s to Mary the dearest friend in the world]_{IP}
 ((26) applied)
- c. (=6a) [His thought *'s #]_{IP} [to come here tomorrow]_{IP}
 ((26) applied)
- d. (=12a) [The man]_{IP} [(whom) you met e]_{IP} ['s just arrived]_{IP}
 ((26) not applied)
- e. (=13a) [Should I *'ve called the police]_{IP} (*I've)
 ((26) applied)

4. 結語

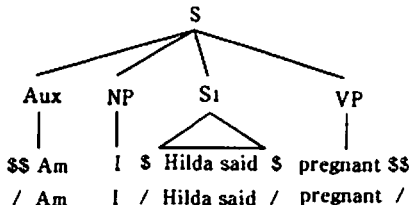
縮約の生起条件について、従来の考え方では統語的、音韻的、意味的要素などさまざまな観点から定義せざるえなかった。そのため、研究者の間では、統語規則として扱われたり、音韻形式部門に属する音韻規則として扱われたりし、明確に位置づけられにくいものであった。本稿では、縮約が、英語のリズム (SW(WS)) と深く関連していることから、縮約を音韻規則と考えた。そして、従来の考え方とは異なった、音韻論的観点に基づいた RSR によって縮約の生起を正しく予測できることを指摘した。その際、規則適用の範囲が音律範疇の IP (Intonational Phrase) であることも挙げた。休止や消去位置が文中に存在しない場合も縮約が生起するが、この点に関してはさらに詳細な分析が必要と思われる、今後の課題としたい。

注

*本稿の作成の際、荒木一雄博士（京都外国語大学）ならびに、編集委員である桥矢好弘教授（甲南大学）、岩田良治助教授（天理大学）から貴重な御意見をいただいた。ここに記して、感謝したい。

- 1 Bresnan (1971), Wood (1979), Kaisse (1983) などは AR を統語規則とし、to 縮約については、Suiko (1978), Chomsky (1981) などが音韻規則であると位置づけている。
- 2 その他に、取りだし位置 (extraction site) や空所 (gap) などと呼ばれる場合がある。
- 3 Downing (1970) は音韻句境界記号 (Phonological Phrase Boundary, PB (\$)) は統語表示における文法的形式素と等しいと考え、(i) に示す規約を経て挿入節と母型文の間にある音韻句境界記号が休止 (/) と解釈されると述べている。

(i) Any segments of n PB's is reduced to a single PB.



- 4 水光 (1985) は (12a) の [The man (whom) you met ____] 's just arrived の空所は、すぐ左に関係節をつくる時に残されたもので、主語の名詞句の内部のものであり、右にくる空所とは異なるとして、統語的關係からこの縮約を説明している。
- 5 本稿で示されるように、(22) の仮定は、様々な種類の縮約現象を統一的に説明するための基礎となりうるが、この (22) で仮定された空所の分類がさらにどの程度自然なものであるかについては今後の研究課題としたい。
- 6 詳しくは、西原 (1992) を参照のこと。

参考文献

- 荒木一雄・小野隆啓 1991. 「英語の輪郭—原理変数理論解説」 (英語学入門講座第1巻) 東京: 英潮社.
- Baker, C. L. 1971. "Stress Level and Auxiliary Behavior in English." *Linguistic Inquiry* 2, 167-81.
- & M. K. Brame. 1972. "Global Rule: a rejoinder." *Language* 48, 51-75.
- Bresnan, J. W. 1971. "Contraction and the Transformational Cycle in English." Reprinted in 1978. Bloomington: IULC.
- Chomsky, N. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- & M. Halle. 1968. *The Sound Pattern of English*. New York: Harper & Row.
- Culicover, P. W. & M. Rochemont. 1983. "Stress and Focus in English." *Language* 59, 123-165.
- Downing, B. 1970. "Syntactic Structure and Phonological Phrasing in English." Ph. D. dissertation, The University of Texas, Austin.
- Jaeggli, O. 1980. "Remarks on *To* Contraction." *Linguistic Inquiry* 11, 239-245.
- Kaisse, E. 1979. "Auxiliary Reduction and the Derivation of Pseudoclefts." *Linguistic Inquiry* 10, 707-10.
- 1983. "The Syntax of Auxiliary Reduction in English." *Language* 59, 93-122.
- 1985. *Connected Speech: The Interaction of Syntax and Phonology*. New York: Academic Press.
- King, H. 1970. "On Blocking the Rule for Contraction in English." *Linguistic Inquiry* 1, 134-136.
- 窪園晴夫・溝越 彰 1991. 「英語の発音と英詩の韻律」 (英語学入門講座第7巻) 東京: 英潮社
- Kuno, S. 1977. "WH-Cleft and IT-Cleft Sentences." *Studies in English Linguistics* 5, 88-117. Tokyo: Asahi Press.

- Lakoff, G. 1970. "Global Rule." *Language* 46, 627-39.
- 1972. "The Arbitrary Basis of Transformational Grammar." *Language* 48, 76-87.
- 桥矢好弘 1976. 『英語音声学』東京：こびあん書房
- Nespor, M. & I. Vogel. 1986. *Prosodic Phonology*. Dordrecht: Foris.
- 西原哲雄 1992. 「Post-Lexical Module 内の音韻規則区分について」『甲南英文学』第7号. 31-48. 甲南英文学会.
- Radford, A. 1988. *Transformational Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sag, I. A. 1978. "Floated Quantifiers, Adverbs, and Extraction Sites." *Linguistic Inquiry* 9, 146-50.
- Suiko, M. 1978. "Phonological Analysis of *wanna* Formation." 『英文学研究』55. 2, 303-17.
- 水光雅則 1985. 『文法と発音』（新英文法選書第1巻）東京：大修館
- 高橋勝忠 1986. 「助動詞縮約の統語的分析とそれらの諸問題」『甲南英文学』第1号. 40-56. 甲南英文学会
- 豊島庸二 1992. 「音調句の境界とリズムの境界」『甲南英文学』第7号. 49-63. 甲南英文学会
- Wiese, R. 1979. "Auxiliary Reduction in English." In Dressler, W. U. et al. (eds.) *Phonologica* 1984. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wood, W. 1979. "Auxiliary Reduction in English: Unified Account." *CLS* 15, 366-77.
- Zwicky, A. 1970. "Auxiliary Reduction in English." *Linguistic Inquiry* 1, 323-36.

甲南英文学会規約

- 第1条 名称 本会は、甲南英文学会と称し、事務局は、甲南大学文学部英文学科に置く。
- 第2条 目的 本会は、会員のイギリス文学・アメリカ文学・英語学の研究を促進し、会員間の親睦を計ることをその目的とする。
- 第3条 事業 本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。
1. 研究発表会および講演会
 2. 機関誌『甲南英文学』の発行
 3. 役員会が必要としたその他の事業
- 第4条 組織 本会は、つぎの会員を以て組織する。
1. 一般会員
 - イ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英文学専攻）の修士課程の在籍者、学位取得者、および博士課程・博士後期課程の在籍者、学位取得者または単位修得者
 - ロ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英文学専攻）および甲南大学文学部英文学科の専任教員
 - ハ. 上記イ、ロ以外の者で、本会の会員の推薦により、役員会の承認を受けた者
 2. 名誉会員 甲南大学大学院人文科学研究科（英文学専攻）を担当して、退職した者
 3. 賛助会員
- 第5条 役員 本会に次の役員を置く。会長1名、副会長1名、評議員若干名、会計2名、会計監査2名、編集委員長1名、幹事2名
2. 役員の任期は、それぞれ、2年とし、重任は妨げない。
 3. 会長、副会長は、役員会の推薦を経て、総会の承認によって、これを決定する。
 4. 評議員は、第4条第1項イ、ロによって定められた会員の互選によってこれを選出する。
 5. 会計、会計監査、編集委員長、幹事は、会長の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
 6. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
 7. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長の職務を代行する。
 8. 評議員は、会員の意志を代表する。

9. 会計は、本会の財務を執行する。
 10. 会計監査は、財務執行状況を監査する。
 11. 編集委員長は、編集委員会を代表する。
 12. 幹事は、本会の会務を執行する。
- 第6条 会計 会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。なお、会計報告は、総会の承認を得るものとする。
2. 会費は、一般会員について年間6,000円とする。
- 第7条 総会 総会は、少なくとも年1回これを開催し、本会の重要事項協議、決定する。
2. 総会は、一般会員の過半数以上を以て成立し、その決議には出席者の過半数以上の賛成を要する。
 3. 規約の改訂は、総会出席者の2/3以上の賛成に基づき、承認される。
- 第8条 役員会 第5条第1項に定められた役員で構成し、本会の運営を円滑にするために協議する。
- 第9条 編集委員会 第3条に定められた事業を企画し実施する。
2. 編集委員は、編集委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は、イギリス文学・アメリカ文学・英語学各2名とする。編集委員長は、特別に専門委員を委嘱することができる。
- 第10条 顧問 本会に顧問を置くことができる。

本規約は、昭和59年12月9日より実施する。
この規約は、昭和62年5月30日に改定。

『甲南英文学』投稿規定

1. 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭で発表したものは、その旨明記してあればこの限りではない。
2. 論文は3部（コピー可）提出し、和文、英文いずれの論文にも英文のシノプシス3部を添付する。ただし、シノプシスはA4判タイプ用紙65ストローク×15行（ダブルスペース）以内とする。
3. 長さは次の通りとする。
 - イ. 和文：横書A4判400字詰め原稿用紙30枚程度
 - ロ. 和文：ワードプロセッサまたはタイプライターでA4判15枚程度（1枚40字×20行）
 - ハ. 英文：タイプライター（ダブルスペース）でA4判25枚程度（1枚65ストローク×25行）
4. 書式上の注意
 - イ. 注は原稿の末尾に付ける。
 - ロ. 引用文には、原則として、訳文はつけない。
 - ハ. 人名、地名、書名等は、少なくとも初出の個所で原語名を書くことを原則とする。
 - ニ. その他については、イギリス文学、アメリカ文学の場合、*MLA Handbook*, 3rd ed. (New York: MLA, 1989)（『MLA 新英語論文の手引き』第3版 北星堂、1990）または *The MLA Style Manual* (New York: MLA, 1985) に、英語学の場合、*Linguistic Inquiry Style Sheet* (*Linguistic Inquiry* vol. 1) に従うものとする。
5. 校正は、初校に限り、執筆者が行うこととするが、この際の訂正加筆は、必ず植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正加筆は認めない。
6. 締切は11月30日とする。
7. 投稿者は、投稿料を負担するものとする。

甲南英文学会研究発表規定

1. 発表者は、甲南英文学会の会員であること。
2. 発表希望者は、発表要旨をA4判400字詰め原稿用紙3枚（英文の場合は、A4判タイプ用紙ダブルスペースで2枚）程度にまとめて、3部（コピー可）提出すること。
3. 詮衡および研究発表の割りふりは、『甲南英文学』編集委員会が行い、詮衡結果は、ただちに応募者に通知する。
4. 発表時間は、一人30分以内（質疑応答は10分）とする。

甲 南 英 文 学

No. 8

平成5年6月20日 印刷

— 非 売 品 —

平成5年6月30日 発行

編集兼発行者

甲 南 英 文 学 会
〒658 神戸市東灘区岡本8-9-1
甲南大学文学部英文学科気付

印 刷 所

株 式 会 社 三 友
〒537 大阪市東成区中道2-15-26
電話 (06) 972-8188
